

第 23 回 日本言語文化学会報告

12月7日(土)午後1時半から行われた第23回日本言語文化学会では、3名の研究発表に加え、コーネル大学の白井恭弘先生にご講演を賜りました。

1 番目の発表である古市由美子さんの「日本語教育実習をどう経験するのか」は、実習生が多言語多文化指向の教育実習をどのように経験し、意味付けているのかをナラティブ分析によって質的に調査をしたものでした。2 番目の発表である陳毓敏さんの「日本語の二字漢語とそれに対応する中国語」は、日本・中国・台湾の辞書の記述から、日本語・中国語・台湾の中国語での二字漢語の意味の違いを探るという研究でした。3 番目の発表である陳美玲さんの「台湾人学習者の文末における「けど」「が」の習得についての一考察」は、日本での生活経験のない台湾人日本語学習者を対象に、文末の「けど」「が」について、学習年数の長短及び用法の違いが習得に与える影響を考察したものでした。

続いて白井恭弘先生には、「日本語におけるテンス・アスペクトの習得 - 研究成果・課題と教育への応用可能性 - 」というテーマでご講演いただきました。テンス・アスペクトの習得研究が生まれた背景、これまでの研究で明らかになった点や残された課題などを大変分かりやすく話していただきました。白井先生のお話は、他の分野の習得研究においても様々な点で参考になる、大変貴重なものでした。

本研究会は大勢の方々のご協力を賜りながら、今後とも有意義な研究会であることを目指していきたいと存じます。今後とも多数のご応募をお待ちしております。

(谷内美智子)